

サリドマイド、スモン、ヤコブなど薬害に関する全国初の総合企画展「薬害を語り継ぐ」＝全国薬害被害者団体連絡協議会(薬被連)主催＝が19日まで、大阪市浪速区の大阪人権博物館「リバティおおさか」で開かれている。実現の背景には、被害事実の継承と再発防止を願う薬害被害者と、大阪府・市の補助金廃止にあえぎながら「市民参加型」展示に活路を見いだそうとする博物館の一致した思いがあった。【林由紀子】

整腸剤「キノホルム」による薬害スモンや多くの奇形児を生んだサリドマイド(鎮静・催眠剤)は、発症から半世紀を経て被害者の高齢化が進み、被害記録の保存・継承が喫緊の課題となっている。しかし、被害者らが国に求めてきた「薬害資料館」の建設は、薬害肝炎検証・検討委員会の「最終提言」(2010年、厚生労働省)に盛り込まれたものの「財政事情もあり、すぐに着手できる状況にはない」(厚生省)のが現状だ。

一方、博物館側は府・市の補助金廃止で人件費削減を余儀なくされ、8人いた学芸員は2人に。志を共有するサポーターに寄付を呼び掛けたり、開館時間を減らしたりと経営努力をして

主催の薬被連

資料館設置への一歩に

きたが、市は博物館の建つ市有地の無償貸与を打ち切り、明け渡しを求めて提訴。入館料収入だけでは特別展や企画展が組めず、博物館としての「本分」を果たせなくなっている。

そんな折、被害を風化させまいと発表の場を模索していた薬被連が、薬害エイズ(HIV)の関連資料を常設展示してきた博物館に相談。約2年の構想を経て、薬被連が展示資料の搬入費用など諸経費を負担する代わりに、博物館が展示や記録作成のノウハウ、展示場所を提供する新たな連携が実現した。

薬被連代表世話人で大阪HIV訴訟原告団の花井十伍代表は「リバティおおさかという『人権の聖地』で企画展ができることは大きな意味がある」と話し、展示を通して「薬害と共に生きてきた被害者の苦しみと同時に、その輝きに満ちた生の営みにも目を向けてほしい」と訴える。

会場はリバティおおさか

運営活路へ団体と連携

会場では、九つの薬害について発生時の社会状況や被害の実態、訴訟の経過などを紹介。被害者の手記や写真は薬害根絶への強いメッセージを伝えるほか、裁判やデモで使われた横断幕やゼッケンはその闘いの激しさを物語る。薬害スモンのコーナーでは、和歌山県在住の中橋輝弥さん(95)が「生きた証」として



企画展で展示されている薬害ヤコブ病被害者と見守る家族の写真＝遺族提供

会場では、九つの薬害について発生時の社会状況や被害の実態、訴訟の経過などを紹介。被害者の手記や写真は薬害根絶への強いメッセージを伝えるほか、裁判やデモで使われた横断幕やゼッケンはその闘いの激しさを物語る。薬害スモンのコーナーでは、和歌山県在住の中橋輝弥さん(95)が「生きた証」として

会場では、九つの薬害について発生時の社会状況や被害の実態、訴訟の経過などを紹介。被害者の手記や写真は薬害根絶への強いメッセージを伝えるほか、裁判やデモで使われた横断幕やゼッケンはその闘いの激しさを物語る。薬害スモンのコーナーでは、和歌山県在住の中橋輝弥さん(95)が「生きた証」として

会場では、九つの薬害について発生時の社会状況や被害の実態、訴訟の経過などを紹介。被害者の手記や写真は薬害根絶への強いメッセージを伝えるほか、裁判やデモで使われた横断幕やゼッケンはその闘いの激しさを物語る。薬害スモンのコーナーでは、和歌山県在住の中橋輝弥さん(95)が「生きた証」として

記録継承 市民の手で



●開催中の企画展「薬害を語り継ぐ」＝大阪市浪速区の大阪人権博物館で、林由紀子撮影●薬害スモンと闘う中橋輝弥さんの作品＝大阪人権博物館提供

◆大阪人権博物館 大阪市浪速区浪速西3の6の36(☎06・6561・5891)。開館時間は、水～金曜が午前10時～午後4時、土曜は午後1時～同5時。日祝・月火曜・第4金曜休館。入館料は大人500円、高校・大学生と65歳以上300円、小中学生200円。

5、12、19日は午後1時半ごろから、サリドマイド、薬害肝炎、陣痛促進剤の被害者によるトーク会を実施。13日午後2時から、薬害教育についてのワークショップを開く。

して病床で描き続けている皮膚とユーモアを織り交ぜた絵を展示。保育士の仕事や陶芸に打ち込むサリドマイド被害者の生き生きとした姿も紹介している。

「大阪の地は、サリドマイドの闘いが始まった場所でもある。11月7日、企画展の一環で開かれた「薬害根絶フォーラム」で、被害者の増山ゆかりさん(52)は大阪での開催意義を説いた。増山さんは、母親が妊娠中に「つわり止め」として処方されたサリドマイドが原因で、両腕欠損の障害を持って生まれた。

1963年3月、大阪・梅田のデパート前に小さな人だかりができた。新聞の投書をきっかけに、サリドマイド被害が全国に及んでいることを知った被害者らが初めて顔をそろえたのだ。呼びかけ人が胸に挿した白

「大阪の地は、サリドマイドの闘いが始まった場所でもある。11月7日、企画展の一環で開かれた「薬害根絶フォーラム」で、被害者の増山ゆかりさん(52)は大阪での開催意義を説いた。増山さんは、母親が妊娠中に「つわり止め」として処方されたサリドマイドが原因で、両腕欠損の障害を持って生まれた。

1963年3月、大阪・梅田のデパート前に小さな人だかりができた。新聞の投書をきっかけに、サリドマイド被害が全国に及んでいることを知った被害者らが初めて顔をそろえたのだ。呼びかけ人が胸に挿した白

「大阪の地は、サリドマイドの闘いが始まった場所でもある。11月7日、企画展の一環で開かれた「薬害根絶フォーラム」で、被害者の増山ゆかりさん(52)は大阪での開催意義を説いた。増山さんは、母親が妊娠中に「つわり止め」として処方されたサリドマイドが原因で、両腕欠損の障害を持って生まれた。

1963年3月、大阪・梅田のデパート前に小さな人だかりができた。新聞の投書をきっかけに、サリドマイド被害が全国に及んでいることを知った被害者らが初めて顔をそろえたのだ。呼びかけ人が胸に挿した白

将来の薬害資料館建設を視野に、厚生省も昨年度から被害証言を映像で残す取り組みを始めた。また、科学研究費を活用して、被害者団体が持つ関連資料をデジタル化し蓄積保存するアーカイブ事業も進んでいる。しかし、薬被連の勝村久司副代表は、恒久的な資料の保存と常設展示の両方が同じ場所で行われる必要がある」と指摘、資料館の早期整備を訴える。

博物館の朝治武館長は「薬害資料館の実現まで、この場所を緊急避難的に資料整理や保管の拠点にしてもらえれば」と提案。その上で「今後さまざまな団体とタイアップして、社会の関心に応えていけるような市民参加型の博物館を目指したい」と話す。